

## きものに関するキーワード探索研究 (第3報)

寺田 恭子\* 内山 道子\*  
知野 恵子\*\* 渡邊 芳道\*\*\*

### The Reserch of Kimono's Keywords(PartⅢ)

Kyouko TERADA, Michiko UCHIYAMA  
Keiko CHINO, Yoshimichi WATANABE

#### 1. はじめに

夏まつり、花火大会、浴衣、日本の柄など日本文化が注目され、伝統回帰現象がおきている現在、ファッション界にもその波が広がりつつある。国際化社会といわれる21世紀を目前にし、多様化したライフスタイルのなかで日本文化に目覚めてきた日本人は、きものに対する意識も変革しているのではないかと考え、今後のきもの方向性を研究する手がかりとして、その実情を調査することにした。

第3報では、きもの専門誌「美しいキモノ」の創刊号にさかのぼり1953年から1963年までの11年間、34シーズンの目次に記載された編集タイトルのテーマを対象に、前回と同様にキーワードの出現状況を分析した。上記専門誌の目次に用いられた編集テーマの中から、(1)きもの地、(2)きもの種類、(3)きもの用途、(4)オケージョンに関するキーワードについてその出現頻度を調査対象にして時系列に分析し、項目間の関連性と11年間の動向を考察した。

#### 2. 研究方法

##### (1) 分析資料

きもの専門誌「美しいキモノ」  
出版社 婦人画報社

##### (2) 分析期間

1953年から1963年 計34冊 ('53年は1冊、'54年、'55年、'56年は2冊、'57年は3冊、'58年から'63年まで4冊発行である。)

##### (3) 分析項目

- 1) きもの地
- 2) きもの種類

---

\*服飾美術科 第3被服構成研究室

\*\*服飾美術学科 被服衛生学研究室

\*\*\*服飾美術学科 ファッションビジネス研究室

3) きもの用途

4) オケージョン

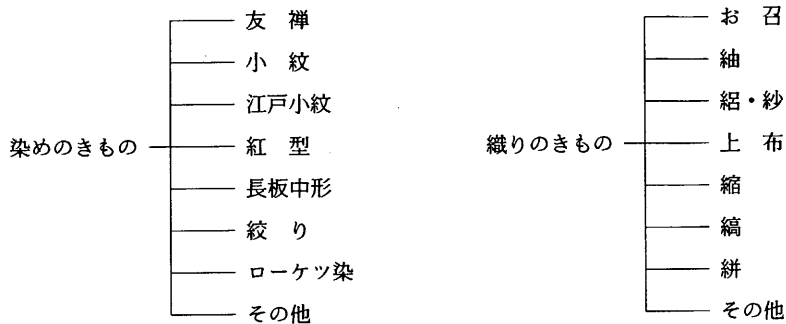
### 3. 分析結果

(1) きもの地

1) きもの地の種類

きもの地の種類を染めのきものと織りのきものに二大別し検討した。一般的に染めのきものは、白地の織物に染色する技法によって種類が区別される。また織りのきものは、糸染めして無地や柄に織り上げた素材によって種類が区別されることが一般的である。(表 1)

表 1 染めのきものと織りのきもの



2) きもの地の分類

'53年から'63年までの11年間の出現頻度を調べるために、染めのきものと織りのきものに分類し検討した。染めのきものと織りのきものに含まれないきもの地が出現したので、それらはその他のきもの地とした。

○染めのきもの(表 2)

染めのきものでは、小紋、友禪、型染、紅型、更紗、ローケツ染め、ゆかたなどおもなキーワードが18抽出された。18のキーワードのなかで小紋、友禪、型染、紅型、更紗、ゆかた、絞りにはその種類が豊富に出現している。また小紋調、小紋風、紅型調、紅型風、更紗調、ローケツ風などが'54年、'56年、'57年に出現しているのが特徴である。出現頻度の高いキーワードは小紋、ゆかた、友禪の順である。

・小紋は11年間すべてに出現している。特に'53年、'60年、'61年、'62年、'63年に高い頻度で出現している。江戸小紋、型染小紋、紅型染小紋などの種類が出現しているのが特徴である。

小紋は日本の代表的な染物であり、本来の袴小紋からでた細かい紋様を江戸小紋と称しているが、現在は一般的に小紋といえればかなり大きな紋様のものまでいい範囲も広く多用であり、準礼装からおしゃれ着まで幅広く用いられる。

・ゆかたは9年間出現している。特に'54年、'61年に高い出現頻度である。また、ちりめんゆ

表2 染めのきもの

(N)

項目	年代											
	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	
小紋(江戸小紋・型染小紋・紅型染小紋含む)	11	5	8	7	5	3	9	24	15	10	24	
小紋調・小紋風		2										
友禅(手描友禅・型友禅・小紋友禅含む)	5	2	3		1	1						
友禅調(加賀友禅・京友禅含む)	1				4						1	
加賀友禅						1						
京友禅							7	5	3	1	1	
型染(中国型染・藍型含む)			1	1	2	1		1	2		2	
紅型(琉球紅型含む)	1	1	1			1		2	2		1	
紅型調・紅型風		1		2	1	1	1	2				
更紗(印度更紗・エジプト更紗・シャム更紗含む)	1				2	1		1	2	2	2	
更紗調(シャム更紗含む)	2	1					1					
蠟染め					1	1	1		2			
ローケツ染め・ローケツ風		2			1		3	2		1	5	
ゆかた(ちりめんゆかた・ちぢみゆかた・しぼのゆかた含む)		16		1	1	6	9	9	11	5	7	
江戸中形・ちぢみ中形								1	1	1		
絞り(総鹿の子絞り・鹿の子絞り・匹田絞り含む)	2		1	1	4	9		5	2	3	2	
草木染め		1	2	2	2	1	1	1	1	3	3	
ぼかし染め										1		

かた、ちぢみゆかた、しぼのゆかたなどの素材別のゆかた名が出現しているのが特徴である。

夏衣のゆかたは奢侈禁止令を意識しながら「粋」の美意識を基に江戸庶民が育んできたくつろぎ着である。現在ゆかたは簡単に着られる普段着であり、気楽に楽しめる夏のファッションアイテムとして人気が高い。

・友禅は10年間出現している。加賀友禅、京友禅の他、技法上から手描友禅、型友禅、小紋友禅など出現しているのが特徴であり、なかでも'58年の京友禅の出現頻度が高い。

友禅は1年を通じそれぞれ美しい季節感があり、絵画的な紋様が表現された最も日本的な美意識が集約されている。多くの種類があるがそれぞれ長い歴史の中に友禅染めをする土地の気風が作風となっている。現在では振袖、留袖、訪問着、付け下げ、小紋などフォーマルからおしゃれ着まで幅広く用いられている。

#### ○織りのきもの(表3)

織りのきものでは、お召、紬、緋、格子など主なキーワードが19抽出された。19のキーワードのなかでお召、縫取お召、紬、縮緬、上布、銘仙、紗などにはその種類が豊富に出現している。また緋風が'54年に出現しているのが特徴である。出現頻度が高いのはお召、紬、緋の順で全体の3分の2以上をしめる。

・お召は11年間常に出現頻度が高い。縫い取りお召も11年間出現している。特に'53年、'62年の出現頻度が高い。マジョリカお召は5年間出現している。

表3 織りのきもの

(N)

項目	年代											
		53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
お召(西陣お召・塩沢お召・桐生御召・十日町御召 秩父御召・紋御召・風通お召・紋抄御召など含む)		12	19	12	22	20	26	24	23	9	20	13
縫取お召(西陣縫取御召・縫取紋お召含む)		12	4	4	2	3	6	3	2	2	15	1
マジョリカ御召								2	7	3	5	1
紬(小千谷紬・上田紬・石下紬・足利紬・筑波紬・館林紬・奄美大島紬 信濃紬など含む)		1	3	1	5	7	3	7	14	11	11	11
大島紬		2					2	2	3	1	6	3
結城紬(多摩結城含む)		1	3	1	4	1	3	2	1	3	4	
塩沢紬(緋塩沢・夏塩沢含む)		1	3		2	1		3	3	1	1	1
村山大島(紬・緋)					1	2	1	2	1	4	1	1
黄八丈(黒八丈含む)		2	1				1		1			
緋(久留米緋・琉球緋・伊予緋・塩沢緋・緋風など含む)		4	13		4	8	16	8	10	10	21	15
格子(変わり格子含む)			2		1	1	1	3	5		1	3
編			2	3	1	1	2	1	4	1	1	1
縮緬(丹後縮緬・長浜縮緬・お召縮緬・縫取縮緬 一越縮緬・紬縮緬など含む)		5	4	1		4	3	4	7	4	4	
駒紹								2	1	2	2	1
上布(越後上布・紋紗上布など含む)			4			1	0	0	0	3	1	1
銘仙(伊勢埴銘仙・足利銘仙・ほぐし銘仙・併用銘仙など含む)		5	1			1	7					
紗(翠紗・紋紗・マジョリカ紗・レース紗など含む)			3					3	4	4	2	5
十日町(十日町塩沢含む)				1		2				1	1	
その他(江戸唐織・芭蕉布・博多織・西陣・風通織・すかし織 絹さつま・絹紅梅・繪子風など)		1			1				1	4	1	2

お召はお召縮緬を略して一般に呼ばれる名称であり、産地は京都西陣、新潟の十日町、群馬の桐生が代表的である。縮緬と違いお召は織る前に糸を練り色染めをするので先練糸染織物という。縫い取りお召は、布地のうゑに模様を刺繍したように織り出す技法のことで、模様を作る糸には糸糸、漆糸、ラメステラとよぶ光る糸などが使われることが多く、豪華な織物を作り出す。またマジョリカお召はスペイン領の地中海のマジョリカ島のマジョリカ焼の陶器の模様を模したところからついた名である。十日町で生産される。お召として売り出されている種類は多く、糸質、織り方、紋様、柄、産地などによってそれぞれ異なった名称で呼ばれていた。戦前までは織りのきもの代表として訪問着や外出着として愛好されていた。

・ 紬は11年間出現している。'60年 '61年 '62年 '63年の出現頻度が高い。塩沢紬は11年間、結城紬は10年間、大島紬は7年間出現している。また紬をみると小千谷紬、上田紬、石下紬などの多くの種類が出現しているのが特徴である。

紬は繭から手で糸を取り出したものや、真綿にしてから糸に紡ぎだしたものがあり、地質、染色ともに堅牢で着るほどに絹のつやが出る。種類が豊富であり高価であるが、正装用として

用いることはあまりなく、おしゃれ着（旅行、ショッピング、観劇）、普段着（お稽古着、家庭着）として着用する大変贅沢なきものである。

・ 緋は10年間出現している。'54年 '58年 '59年 '62年 '63年の出現頻度が高い。久留米緋、琉球緋、伊予緋、塩沢緋など多くの種類が出現しているのが特徴である。

緋は経、緯の糸をくくって防染されるのが一般的であり、とびとびに染められた糸を経、緯に組み合わせて織りあげ緋の柄を出す。農村で育まれてきたもので、地方色が強く種類も非常に多い。素朴で品のある風合いが多くの人に愛され、明治から大正にかけて日本中に広まり、普段着から外出着にまで幅広く用いられた。

○その他のきもの地（表 4）

その他のきもの地としてウール・絹・麻・綿・化繊など洋服地も含め素材別に多くの種類が出現し19のキーワードが抽出された。

'53年に洋服地によるきもの地が出現し、その後化繊素材などが次々に出現している。なかでもウールの出現頻度が高い。特に '58年 '59年 '60年 '61年 '63年の出現頻度が高く、また種類が多く出現しているのが特徴である。その他毛織物としてセル、英ネル、ギャバジン、ウーステッドが出現している。絹としてタフタ、サテン、バックサテン、麻はリネン、リネトロン（ポリエステル・麻の混紡織物）、綿はオーガンジーやもめん、古代もめんなどが出現頻度は低いが登場している。'58年にはレース類が7回、プリント類が8回出現しているのが特徴である。

表 4 その他のきもの地 (N)

項目	年代												
	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63		
ウール(ウール縮緬・ウールお召・ウール小紋・緋ウール・ウール紋り ウール紗・ウールボーラー・サマーウール・シルクウールなど含む)				3	3	7	14	16	25	19	9	16	
セル						1							
英ネル												1	
ギャバジン			1										
ウーステッド			1										
タフタ			1										
サテン・バックサテン			1				1						
リネン・リネトロン			1									1	
オーガンジー									1				
もめん・古代もめん		1	2			1							
レース(エバグレース・テトロンレース)		2				7	3	3	1				
ナイロンチュウル						1							
プリント・ボーダープリント						8	1	1			1		
グログラン			1			2							
ジャージ			1										
ベンベルグデシン		1											
輪ビロード					1								
洋服地・広幅生地・広幅緋	1	2		1	1								
化繊・広幅化繊・合繊・交織		5	2	1	1			1	1				

## (2) きもの種類

きもの種類は礼装着、略礼装着、外出着、おしゃれ着、普段着のように用途別に区分され、さらに模様付け、きもの地（染め、織り）、紋、地色などの要素が複雑に組み合わせられ分類されている。一般的には表5のようにきもの種類を分類することができる。この分類を基準にし、きもの種類に関するキーワード19を抽出することができた。（表6）

表5 きもの用途と種類

用途	目的・場所	きもの種類
礼装着	結婚式や公的な儀式など 格式を重んじるとき	花嫁衣裳 本振袖（ミス、染め抜き5つ紋付き 黒縮緬の絵羽総模様） 黒留袖（ミセス、染め抜き5つ紋付き 縮緬地の裾模様） 色留袖（染め抜き5つ紋付き） 喪服（染め抜き5つ紋付き黒縮緬 または黒羽二重）
略礼装着	礼装に次ぐもので色・模様とも に少しくだけ、華やかさがあり、 結婚式の披露宴や卒業式、入学 式、初釜などのとき	色留袖（紋付き） 振袖 中振袖 訪問着 色無地（紋付き） 江戸小紋（紋付き）
外出着 おしゃれ着	社交用として格をもたせて装う ものと、外出用として個性に合 わせて趣味的に装うものがある。 TPOに合わせて、パーティお しゃれ着、お茶会、街着など	色無地 江戸小紋 付け下げ 付け下げ小紋 小紋 お召、袖
普段着	ちょっとした外出、ショッピング、 お稽古、家庭でのくつろぎ のとき	袖、緋 銘仙 ウール ゆかた

### 1) 礼装着

礼装着は留袖類（黒留袖、留袖、江戸褌）、振袖類（黒振袖、振袖、中振袖、色振袖）が出現している。しかしいずれも出現頻度は低く、ミセスの第一礼装である留袖類は婚礼用として着用され、'61年には江戸褌という模様付けからの名称で取り上げられている。ミスの第一礼装である振袖類も出現頻度は低いが11年間さまざまな種類で出現している。'54年、'55年の黒振袖は「黒振袖の花嫁衣裳」という取り上げかたで婚礼用として用いられている。

### 2) 略礼装着

略礼装着は訪問着が11年間連続して出現頻度が高い。

訪問着は明治時代にはいつから生れ大正時代に確立した。一般庶民に着られるようになったのは、大正末期から昭和の初め頃で絵羽模様のきものとして訪問服、社交服とも呼ばれ、形式が整えられた。留袖のように儀式ばったものではなく礼装に次ぐ物で、用途に広いきものである。総模様の華やかな物、裾模様の上品なもの、肩裾模様、腰高模様などT.P.O. に応じて

表6 きもの種類

(N)

種類	年代													
		53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63		
白打掛			1											
白無垢			1				1							
黒留袖			2											
留袖		1		2	1	1	3							2
江戸褌										2				
黒振袖			1	1										
振袖		1		1	1	1			1	1				
中振袖			1					5	1	2	1	1		3
色振袖				1										
訪問着		21	11	36	25	42	53	43	53	48	47	27		
付け下げ		1												
江戸小紋		1		2										
小紋		10	5	5	7	7	4	6	16	9	10	16		
お召		25	20	11	27	21	28	28	29	16	35	16		
紬		3	6		7	7	4	10	19	18	19	15		
緋		4	10		4	8	15	5	11	15	27	20		
銘	仙	6	2			1	5							
ウール			3		4	4	9	13	15	14	9	8		
ゆかた			16		1	1	6	9	9	11	5	7		

自由にできるのも訪問着の特色である。生地は一越縮緬、紋縮緬、紋意匠縮緬、夏には絹などが用いられる。文様、色、年齢、着方、場所、ミス、ミセスの区別なく自由で気軽であり、しかも気品と華やかさがある点が特徴といえる。最近では趣味的な訪問着として、織りの白生地を染めたもの、紬を絵羽付け風に織り上げたものなどまったくの趣味性の強いものなどがみられるが、正式な場所への着用はふさはしくない。

### 3) 外出着、おしゃれ着

外出着、おしゃれ着としては小紋、お召、紬の出現頻度が高い。特に小紋、お召は11年間連続して出現頻度が非常に高い。

小紋は型染めの代表的なもので外出着、おしゃれ着として格式のある柄からモダンな新しい感覚のもので着用目的にあわせ選ぶことができる応用範囲の広いきものである。

お召は縮緬より腰があり、しゃっきりとした感じが好まれる。無地、縞、緋、紋織り、縫い取り、風通お召などがあり着尺、羽尺、コート、袴地などに用いられている。昔も今も変わらずよく好まれているものに矢羽根緋のお召がある。

紬は10年間出現している。紬はくず繭を真綿に作って糸を紡いで織った自家製織物で、素朴な味わいがある。今はいろいろな紬が織られ産地の名前をつけたものが多い。先染めの織物が持つかたさ、しゃっきりとした感触が美しさを作っている。しゃれで、さりげなく着ることができる深みのある外出着、おしゃれ着の代表格のきものである。

#### 4) 普段着

普段着は紬、緋、ウール、ゆかたの出現頻度が高い。紬、緋は10年間出現している。

紬は自家製織物で普段着の代表的なきものであったが、織り方、産地によって格の高いものから普段着までさまざまなものがある。着用目的に合う風合いを選び外出着から普段着まで着ることができる。

緋は産地名をつけたものが多く、民芸風またふるさとのなつかしさとして息づいている。風合いがよく軽く着やすいきものである。

ウールは9年間出現している。簡単に手にはいるダブル幅の服地をきものの形にして着たことから、ウールの和反物の生産がされるようになった。ウールに伝統的な色柄がほどこされ、織りのもの、染めのものときもの地が多様化されてきた。暖かく、気軽に着用できる普段着である。

ゆかたは9年間出現し、夏物の代表的な普段着として取り上げられ、あくまでも家庭着、くつろぎ着として用いられている。

#### (3) きものの用途

きものを用途別に分類する上で格付けに準じ、礼装着・社交着・おしゃれ着・普段着の4項目に分類しその出現頻度を検討した。(表7)

表7 きものの用途別分類

(N)

用途		年代										
		53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
礼 装 着	礼 儀 祝				1		1					
	装 式 着 着											
社 交 着	パ ー テ ィ 着			1		8	3	1	6	1	6	6
	晴 れ 着						3	1	6	1	1	
	社 交 着					1						
	ニ ュ ー キ モ ノ				1	2	1					1
	お よ ば れ 着				1							3
	イ ブ ニ ン グ キ モ ノ					1	1		1		1	1
	カ ク テ ル キ モ ノ					1	1		1		3	1
お しゃ れ 着	夜 会 服										1	1
	ホ ス テ ス キ モ ノ										1	
	外 出 着	6	2	6	12	16	21	18	31	16	13	8
	お しゃ れ 着					4		4	9	4	6	12
普 段 着	お しゃ れ 着					2	8	5	1	1		
	街 着						8	10	11	14	8	4
	お 座 敷 着					1						
	お 買 い 物 着						1					
普 段 着	遊 び 着							1				
	普 段 着		1	2	1	7	3		6	1	1	
	家 庭 着			2		2		2				1
	散 歩 着				1	1						
普 段 着	日 常 着					1						
	イ ン ス タ ン ト キ モ ノ											1



### 1) 礼装着

礼装着は'58年に 1回出現しているだけである。また儀式着は今回はじめて登場したことばである。冠婚葬祭用のきものであると思われるが、ここでは何の儀式のきものかがい知ることにはできない。しかし礼装着の一つであると考えられる。祝い着は七五三のきものをとりあげている。

### 2) 社交着

社交着では、パーティ着の出現頻度が高い。ついで正月用のきもとして晴れ着が上げられる。高度経済成長期に入る '57年、'58年の頃から毎回登場しているのも特徴である。社交着のなかで目に付くのがイブニングキモノやカクテルキモノである。夜会服としてのきものがここに登場しているのも、戦後の明るい兆しの現れではないかと思われる。また、戦後の新しいスタイルのきもとして、様々な提案が成され、それらをニューキモノと呼んだ。洋服のデザイナーなどからも、ツーピースきものや洋服地などを使ったきものが発表され話題となった。

### 3) おしゃれ着

用途別分類の中で、最も出現頻度の高かったのが外出着であった。おしゃれ着、街着も高い出現頻度で、全体の上位 3項目をおしゃれ着でしめた。またしゃれ着として中年女性を対象とした個性的なきものや色、柄に新しさを求めた趣味のきものをとりあげている。

### 4) 普段着

普段着がこの頃はまだまだ残っている。洋装化が進んだとはいえ、きものに慣れ親しんできた年配の人達には、日常着とともに趣味やおしゃれ感覚で、生活の中にきものが溶け込んでいようようにうかがえる。

## (4) オーケージョン

### 1) きものと年中行事 (表 8)

表8 きものと年中行事 (N)

季節	行事/年代	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
春	節 句			1								
夏	梅雨・雨				1			2	1			1
	七夕・夕						1	1	1			1
秋	七五三		1		1		1		1			1
冬	正月	2					1	1	9	12	2	2
	初春・新春						5	6	6	12	11	4
	クリスマス						2	1	8	6		1
	初詣										1	

11年間できものと年中行事との関連性において特に顕著であったのは、季節では冬、行事では新年の初春、新春、正月に集中し、'58年を起点に出現している。'61年、'62年に多くキーワードが出現していることは、正月にきものを着ることが、かなり普及していたと考えられる。正月に比べ出現頻度は低いがクリスマスにも正月と平行して出現し、パーティなどに社交としてきものが着装され始めていたと推測される。次ぎに出現しているのは季節では夏の梅雨秋の七五三での着装場面である。子供の七五三に際し母親のフォーマルな装いとして普及し始めた頃である。春の節句、冬の初詣はまだ年中行事との関連性がきわめて低かった。もはや戦後ではないが、正月にきものを着るとい生活のゆとりがうかがえる。しかしまだ年中行事ときもの着装場面との関連性が明確ではなかった。その理由はきものが本格的にフォーマル化の方向へ移行していなかった時代といえる。

2) きものとT.P.O (表 9)

用途とオケージョンのキーワードの関連性を11年間の出現頻度の合計からみると、おしゃれ着がオケージョンを示すキーワードの数とともに多く出現している。ついで社交着、礼装着、普段着の順である。外出着としてのおしゃれ着に重点がおかれているといえる。おしゃれ着を着装する場面の出現頻度が高いのは、午後・昼、宵・夜、お出掛け・外出で着装場面の設定が漠然としているが、外出を目的としているのが特徴である。次に多いのが集まり、劇場・芝居・

表9 きものとTPO (N)

用途	TPO/年代	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
礼装着	婚礼・披露式 結婚 婚		3	1	1	2	1	1	1	1		
社交着	お茶席 パ一ティ 招園遊 待会	1	1		1	1	2	1		3		1
おしゃれ着	劇場・芝居・舞踊会		2			1				2		2
	夜・宴			2	5		2	2	2		2	3
	午後・昼			2	3	3	6	2	2			4
	集まり			2	1	2	2	1				
	外出			1	2	5	3		1		1	2
	旅・旅行					1		1	1		2	1
	散歩・散策					1						2
	訪問						1					3
	街角								1			3
	ホテル物											1
普段着	休家 日庭						1					1

舞踊会、さらに旅行・旅、街・街角、散歩・散策、訪問の順に外出という着装場面が明確に設定されている。この着装場面の設定が登場し始めるのは'55年からであり、特に'56年から'58年までの3年間で'63年に顕著に現れ、きものが外出を目的としたおしゃれ着の着装場面の設定が多く登場し、外出着、街着が中心であったといえる。社交着ではパーティ、招待、お招れ、お茶席に着装場面の定着が見られる。出現頻度の増減はあるが、毎年継続して登場していることから理解できる。礼装着である婚礼・披露宴、結婚式・晴の日では出現頻度は低く、'54年から'61年まで継続しているが、きもの着装場面の中心的な存在となっていない。普段着の着装場面は休日、家庭が出現しているが出現頻度がきわめて低く、家庭周辺の普段着としての着装場面設定は補足的な位置づけである。

#### 4. 要約

##### (1) きもの地

きもの地は染めのきものと織りのきものとその他のきもの地の3つに分類された。

- ・染めのきもでは小紋、ゆかた、友禅の出現頻度が高い。
- ・織りのきもではお召、紬、緋の出現頻度が高い。
- ・その他のきもの地ではウールのきもの地の出現頻度が高い。

##### (2) きもの種類

きもの種類の出現頻度の高いキーワードは訪問着、お召、緋、紬、小紋、ウール、ゆかたの順であった。なかでも略礼装の訪問着が11年間連続して、非常に出現頻度が高かった。礼装着の出現頻度は低かった。

##### (3) きもの用途

用途別分類における出現頻度の多い項目は、外出着、街着、おしゃれ着、パーティ着、普段着の順であった。なかでも外出着の出現頻度は11年を通して非常に高かった。礼装着の出現頻度は低かった。

##### (4) オケーション

###### 1) きものと年中行事

'61年、'62年には、すでに正月にきものを着ることがかなり普及していたと考えられる。次いでクリスマスにも正月と平行してきものがパーティなどに社交着として着装され始めていたと推測される。

正月にきものを着るとい生活のゆとりがうかがえるが、まだ年中行事ときもの着装場面との関連性が明確ではなく、きものがフォーマル化していなかった時代であるといえる。

## 2) きものとT.P.O

外出を意味する着装場面のキーワードが'56年から'58年までの3年間で'63年に多く出現し、外出を目的としたおしゃれ着で、洋装での街着が主流をしめていたことがわかる。

社交着では、パーティやお茶席などでの着装が定着し始めている。出現数の増減はあるが、毎年継続して登場していることから理解できる。礼装着は、きもの着装場面の中心的な存在になっていなかった。普段着の出現頻度はきわめて低かった。

## 5. まとめ

(1) から (4) までの分析項目のまとめを総合し、きものに関するキーワードの関連図(図1)を作成した。この結果'53年の創刊号から'63年までの11年間(34冊)の「美しいキモノ」における編集テーマを時系列に分析することにより、きもの動向を考察した。

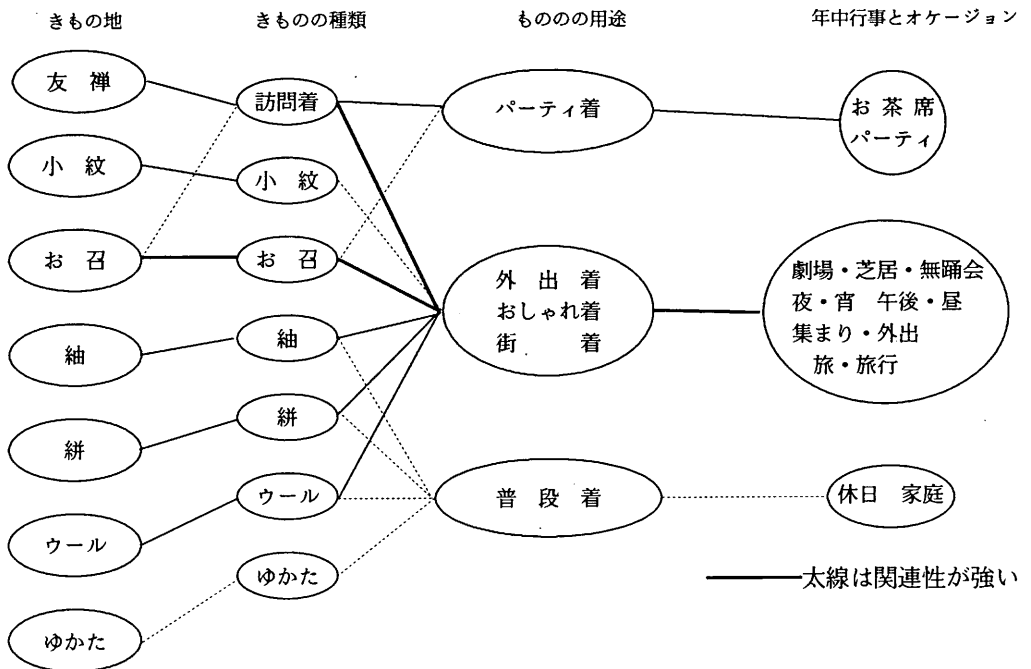


図1 きものに関するキーワードの関連図

- ・きもの地においては、お召に集約された。
  - ・きもの地の種類においては、訪問着、お召が多く取り上げられた。
  - ・きもの用途としては、外出着に集約された。
  - ・オケージョンにおいては、外出を目的としたおしゃれ着に集中した。
- この11年間のきものは外出着、おしゃれ着が主流をしめていた。

## 謝 辞

この研究を進めるにあたり、婦人画報社「美しいキモノ」編集長の岡本光幸氏、文化女子大学・図書館に資料等のご協力をいただきましたことを、深く感謝致します。

## 参考文献

- 1) 美しいキモノ，婦人画報社，（東京），1953（創刊号）～1963（冬号）
- 2) きものに関するキーワード探索研究，東京家政大学生活資料館紀要，第2集，1997，  
p45～56
- 3) きものに関するキーワード探索研究（第2集），東京家政大学博物館紀要，第3集，1998，  
p75～87
- 4) 最新きもの用語辞典，文化出版局，（東京），1987
- 5) 木村孝のきもの・しきたり辞典，婦人画報社，（東京），1988
- 6) 藤本やす他，被服平面構成，衣生活研究会，（東京），1991
- 7) 田中千代：新・田中千代服飾事典，同文書院，（東京），1991
- 8) 和裁・初級編，財団法人 日本ファッション教育振興協会和裁専門委員会，（東京），1995
- 9) 和裁・中級編，財団法人 日本ファッション教育振興協会和裁専門委員会，（東京），1995
- 10) 荒木健也，染色シリーズ（2）・友禅，装道出版局，（東京），1997
- 11) 荒木健也，染色シリーズ（5）・中形・江戸小紋，装道出版局，（東京），1995
- 12) きもの教本・財団法人民族衣裳文化普及協会，（東京），1980
- 13) 日本服飾小辞典（I），源流社，（東京），1979
- 14) きもの用語大辞典，装道出版局，（東京），1991
- 15) 呉服に強くなる本，日本繊維新聞社，（東京），1997